

教育研究業績書

2017年10月20日

所属：教育学科

資格：教授

氏名：高井 弘弥

研究分野	研究内容のキーワード
発達心理学・特別支援教育	認知・社会性の発達と障害
学位	最終学歴
文学修士, 文学士	京都大学大学院 文学研究科 心理学専攻 博士課程 満期退学

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. 障害児保育	共	2018年4月刊行予定	晃洋書房	鶴宏史編著 第2部 障害の理解と保育における発達の援助 1章 発達の理解－乳幼児期の発達の概要と発達検査の見方 5章 知的障害児の理解と援助 6章 発達障害児の理解と援助①（自閉症スペクトラム） 7章 発達障害児の理解と援助②（ADHD・LD）を担当。 「1章 発達の理解－乳幼児期の発達の概要と発達検査の見方」では生涯発達の観点から乳幼児期の発達の重要性や発達の理論、そして様々な発達検査について概観した。「5章 知的障害児の理解と援助」では、知的障害の特徴とその支援についてまとめた。「6章 発達障害児の理解と援助①（自閉症スペクトラム）」では、自閉症スペクトラムの特徴と支援について、特に感覚過敏の観点からまとめた。「7章 発達障害児の理解と援助②（ADHD・LD）」では、ADHD・LDの特徴と支援について、報酬系の課題としてとらえて論じた
2. 教育学科への招待	共	2015年4月	武庫川女子大学出版部	「PART II 09特別支援教育から考えること」を担当。障害について考えることの社会的意義について解説。
3. 〈私〉という謎 自我体験の心理学』	共	2004年	新曜社	発達心理学から見た自我体験 (pp. 195-213) 近年自我心理学および青年心理学の分野で取り上げられることが多くなってきた「自我体験(ich-erlebniss)」という現象について、発達心理学の立場から検討した。この現象の性質上主観的な報告に頼ることになりがちだが、規範の相対性の認識や自己意識・自己認知の相対的な視点の獲得などといった認知発達上の転換点とこの自我体験という現象が連関を持っている可能性を指摘し、今後の研究の方向を示唆した。
4. 子どもの発達心理学を学ぶ人のために（	共	2003年	世界思想社	「第1部子ども理解の枠組み第2章発達の理論」(pp. 12-32)では、発達心理学において理論とはどのようなものか、なぜ理論が必要なのかを論じ、発達心理学を作り上げたいくつかの理論を紹介した。 「第2部何がどう発達するの第6章「自己」の発達」(pp. 151-170)では、自己意識の発達を認知発達

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
5. 『年齢の心理学－0歳から6歳まで』	共	2000年7月	ミネルヴァ書房	の転換期と関連させて考察し、その論拠となる先行研究を紹介した。 0歳と1歳－発達と文化の接点 (pp. 25-62) 母親へのアンケート調査により、子どもが1歳になる前に持つイメージと1歳になった後での実感とを比較し、日誌記録による縦断データで、親の側の見方の変化を子どもがどう受け止めていくかについてみた。 (分担執筆者：岡本夏木・麻生武・海老沢由美他)
6. 『子どもは認知やことばをどう育てるか－健常児・障害児に共通な発達機制－』	共	1996年11月	培風館	乳幼児期初期の人との関わり方の発達 (pp. 81-89) 執筆 乳児期の母子相互作用について、そのパターンが月齢によって変化するだけでなく、声によるやりとりと表情の模倣では異なることがわかった。このことは、その後の母子の、ことばによるコミュニケーションのパターンの萌芽がこの時期からあらわれることを示唆している。 (分担執筆者：井上幸・岩崎隆彦・大森千代美・岡美代子・片岡基明他)
7. 講座『幼児の生活と教育』3個性と感情の発達	共	1994年6月	岩波書店	個性のあらわれ－ゼロ歳児から2歳児まで (pp. 195-212) 新生児期から2歳前後までの子どもが「その子らしさ」を出していく過程、そして親が「その子らしさ」を見いだしていく過程をまとめ、保健所等での発達カウンセリングでのしつけの問題や2歳児の反抗などについても論じた。 (pp. 195～212) (分担執筆者：野村庄吾・久保ゆかり・柏木恵子・矢野喜夫・松永あけみ他)
2 学位論文				
3 学術論文				
1. アメリカにおける就学前の発達支援施設および幼児教育施設におけるピア・モデルプログラム	単	2012年3月	武庫川女子大学大学院文学研究科教育専攻教育学研究論集第9巻	アメリカ合衆国の地方都市における、知的障害・発達障害の子どもたちの療育施設で行われている健全な子どもたちとの統合教育、ピアモデルプログラムの実態とその効果について検討した。我が国では、一般的に統合教育といわれると、健常児のクラスに少数の障害のある子どもたちが参加するという形がほとんどであり、逆統合といわれる例でも、単に障害のある子どものクラスを健常児が一時的に訪れて活動することのみである。しかし、障害のある子どもが多数を占める療育教室に健常児が参加するというこのユニークなプログラムでは、障害のある子どもと健常児の双方にとって様々な面で有効である可能性が示唆された。
2. 道徳判断における直感システムと推論システムの関連	単	2010年	武庫川女子大学大学院教育学研究論集第5号、p. 27-32.	Haidt (2001) が提出した道徳の「社会的直感モデル」に基づき、道徳的ジレンマに対する回答を行う際に、道徳的直感による判断と合理的な推論による判断がどのように働くかを検討した。大学生を対象にした質問紙による調査の結果、短時間での回答を行った場合には道徳的直感に基づく判断が、時間をかけて回答した場合には合理的な推論による判断がなされていることが示された。ここから、道徳的直感と推論の二つのプロセスをどう統合して機能させることが有効か、という問題提起を行い、さらに、自閉スペクトラム障害の道徳判断を指導する上で、このような直感と推論の相補的な関連に注目することの重要性を示唆した。
3. 学習動機・達成動機と授業評価の関連－「やる気のある」学生からの授業評価を生かすために－	単	2009年	武庫川女子大学大学院教育学研究論集第4号	大学生が授業評価をする上でどの項目を重視しているかとその学生の学習動機・達成動機との関連を調べた。その結果、学習動機・達成動機が高い学生ほど授業評価では内容を重視し、低い学生は授業の内容よりも形式(授業時間が守られているかなど)を重視していることがわかった。
4. 自閉症スペクトラム症候群における道徳規範の潜在学習と道徳感覚(1)	単	2008年03月	武庫川女子大学紀要(人文・社会科学)	自閉症スペクトラム症候群の子どもたちで不得意とされる社会的規範・ルールの獲得について、潜在学習という観点から検討した。
5. 幼児の植物概念と目的論的思考－食用植物の栽培を通して－	共	2007年12月	島根大学教育学部紀要(教育科学)	大谷修司・相原泉・高井弘弥 幼児が科学的生命概念を獲得する上で重要だと考えられている植物栽培の経験について検討した。幼稚園5歳児で、半年間の食用植物の栽培を通じて、科学的生命概念、特に目的論的生命概念の獲得の過程を縦断的に考察した。
6. 道徳的違反と慣習的違反における罪悪感と恥の理解の分化過程	単	2004年	発達心理学研究 第15巻1号pp. 2-12ページ	道徳的・慣習的違反のあとに、謝罪や補償などの向社会的行動をとるか、それとも逃避などの非社会的行動をとるか、の推測に関して、罪悪感と恥の感情を媒介にして検討した。幼児ではどんな場合であっ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
7. 初期シンボル化過程における自己 確定期の検討	共	1999年	心理学評論 第42巻 1 号 pp. 23-34	でも違反に対しては罪悪感に媒介された向社会的行動をとると推測していたが、成人では慣習的違反の場合や道徳的違反でも軽微な場合など状況によっては恥の感情に媒介された非社会的行動をとることもあり得ると考え、その移行過程が小学生の時期に見られた。 音声と意味とが結びつく言語発達の初期の局面について、縦断的観察データを基に論じた。音声と意味とを結びつける内的な活動を想定して、以後の単語の獲得との関連を探究した。 著者：高井弘弥・高井直美、共同研究につき本人担当部分抽出不可能
8. 「価値の内化」研究の転回	単	1998年	樟蔭女子短期大学紀要 『文化研究』第12号pp. 27-39	児童期において、道徳やルールといった規範がどのように獲得されるのか、という「内化」の問題についての最近の研究をレビューした。
9. 初期シンボルにおける身振り動作 と音声言語との関係	共	1996年	発達心理学研究 第7 巻 1号pp. 20-30	ことばの発達の初期段階で、それまで用いていた身振り動作による表現が音声による表現にとってかわられる過程について、縦断的観察によるデータを基に論じた。ここから、身振り動作と音声とは拮抗する関係にあるのではなく、相補的な関係にあることも推測された。 (著者：高井直美・高井弘弥、共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
1. 人格と自我：1歳違えばどう違う？	共	1997年	日本発達心理学会第8回 大会ミニシンポジウム	
2. 学会発表				
1. Short-term Longitudinal Study on School Adaptation in Japanese Elementary and Junior High Schools: Focus on the Social and Deliberative Skills	共	2017年9月16日	Japan-U. S. Teacher Education Consortium (J USTEC) 29th Annual Meeting	
2. Short-term Longitudinal Study in Japanese Elementary and Junior High Schools Regarding School Adaptation -Is There Any Sign before Being Maladjusted?-	共	2016年11月16日	Japan-U. S. Teacher Education Consortium (J USTEC), 28th Meeting	
3. A Cross Cultural Comparison of Japanese and American Elementary and Middle-School Children's Attitudes and Behaviors Toward Academic and Social Issues	共	2013年	Japan-U. S. Teacher Education Consortium (J USTEC), 25th Meeting	
4. 道徳的アイデンティティと非道徳的行動に対する善悪判断の関係	共	2013年	日本感情心理学会第21 回大会	
5. 新版K式発達検査：検査項目の意味を考える	共	2011年	日本教育心理学会第53 回大会	
6. 統合保育下の子どもたちは障害児をどう受け止めているか-ドット法と半構造化面接による検討	共	2010年	日本特殊教育学会第48 回大会	
7. 幼児の植物概念と目的論的思考	共	2008年03月		高井弘弥、大谷修司、梶原泉 幼児教育の中で広く行われている食用植物の栽培について、単に心情的・情緒的な発達についてではなく、科学的認識、特に植物の自己利益的目的と人間の自己利益との対立などについて、幼児がどのように認識していくのかを検討した。
8. 発達障害児における罪悪感・恥の理解	共	2008年	日本教育心理学会第50 回大会	
9. 「うしろめたさ」の機能と構造	単	2004年	日本発達心理学会第15 回大会	
10. 子どもにおける逸脱行動・校社会的行動に対する認知と親の価値の継承(2)	単	2002年	日本発達心理学会第13 回大会	
11. Situational antecedents and behavioral tendencies on moral and conventional transgressions: Developmental process of differentiating guilt and shame	単	2002年	The International Society for the Behavioral Development, 17th Biennial Meeting	
12. 1歳児における関係づけ行動の発達	共	1997年	日本発達心理学会第8回 大会	
13. 幼児期における他者の気持ちの理解と象徴遊び	共	1996年	日本発達心理学会第7回 大会	

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
14. 幼児期初期における他者の気持ちの理解と一人会話	共	1995年	日本発達心理学会第6回大会	
15. 1歳児の身振り動作と言語発達	共	1994年	日本発達心理学会第5回大会	
16. 1歳児の対象を関係づける行動と言語発達	共	1991年	日本発達心理学会第2回大会	
17. 図形認知の方向規制に関する発達の研究（1）	共	1991年	日本発達心理学会第2回大会	
3. 総説				
1. 佛教大学通信教育部テキスト『障害児心理』	共	1997年	佛教大学通信教育部	精神薄弱の定義について通説をまとめ、さらにIQやその他の尺度にとらわれない新しい分類についても紹介し、小中学校での障害児担当教員にとって有用と思われる考え方を提示した。（pp. 53～63）
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 共に考える 小学校の授業のための哲学的探求	共	2015年11月	萌書房	フィリップ・キャム著、榊形公也監訳『Thinking Together: Philosophical Inquiry for Classroom』の第4章「探求の共同体を作る」を担当。
6. 研究費の取得状況				
学会及び社会における活動等				
年月日	事項			